

平成三十年度 九州国際大学付属高等学校

国語 入学試験問題

問題用紙（1～15ページ） 試験時間（50分）

注意事項

1. 試験問題は、試験開始の合図があるまで開けないこと。
2. 試験開始後、問題冊子の印刷の不具合などに気付いた場合は手を挙げて監督者に申し出ること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 携帯電話、計算機、アラーム等の使用は禁止する。
5. 体調不良等の場合は、監督者に申し出ること。
6. 問題用紙は、各自持ち帰ること。

字数制限のある問いについては、句読点も一字とします。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 さて、環境保護に話を戻そう。もし自然に[※]内在的価値が、それも道徳的な意味での内在的価値があるとしたらどうだろう。自然破壊によって引き起こされるさまざまな人的・社会的被害の発生を待たずともなく、自然破壊それ自体が、動植物や生態系の権利侵害という人権侵害に近い^aシンコクな道徳的問題を引き起こすものだということになる。環境思想では、人間以外の存在にも道徳的に配慮しなければならぬという考え方を「非人間中心主義」と呼ぶが、A非人間中心主義を社会の基本方針に据えようとする試みが達成されれば、環境保護運動は極めて^bキョウコな土台が手に入ることになる。道具としての価値とは異なる価値であるはずの内在的価値が、環境保護を有利に進めるための一種の道具になるとするのは、^①ある意味で皮肉な話ではある。とはいえ、環境問題という現代社会が直面する大きな危機を乗り越えられるのであれば、そのようなことは大した問題ではないのかもしれない。だが、内在的価値とそれにもとづく非人間中心主義という考え方は、環境保護を考えるうえでどこまで有効かつ適切なのだろうか。

2 内在的価値にもとづく非人間中心主義の考え方は、自然の道徳的価値や権利を主張することで、経済活動に伴う^{よもな}自然開発や汚染を規制し、環境保護の^②ソクシンに役立つことが期待される。しかしながら、そこには二つの問題がある。一つは、規制を論じるだけでは一面的に過ぎるということだ。確かに私たちの社会はさまざまな規制があり、それらなくしては秩序や治安を保つことはできない。だが自分自身が子ども時代や大人になってから経験してきた社会生活を思い返してみよう。学校の授業であれ町内会や企業などの活動であれ、集団の活動が一定の秩序をもつて^③スイコウされるのは、その集団に属する個人が一定程度、自発的に集団の規則やその規則のもとにある理念を尊重していたからではないだろうか。規則に書かれていること以外は一切好き勝手に、B脱法的に振る舞おうとしてばかりの個人が集まったところで、集団を維持することはできない。だからといって構成員の一挙手一投足まで縛ろうとすれば、規制は極度に抑圧的なものとなり、結果として多くの逸脱や反抗を招いて、やはり集団を維持できなくなってしまうだろう。

3 環境保護のための規制についても同様のことがいえる。規制が機能するのは、規制の理念を尊重する集団の存在があってこそであり、すべてを厳格な規制で制御しようとする^④自由な経済活動も民主主義も立ち行かなくなるだろう。なにより、人びとのあいだに、適切な規制やあるべき社会像を自ら発信する態度、Cそうした発信を行う個人や団体を支持するという態度なくして、社会を望ましい方向に変えていくことなどできるだろうか。自然の内在的価値にもとづくものに限らず、規制にばかり目を向け、市民の環境意識や道徳観の[※]涵養に言及しない議論はこの点を見落としている。

④ もう一つの問題は、自然に道徳的な内在的価値があるという着想自体にある。美しい山や川といった生態系、[※]屋久杉のように、^⑥タイコより生育してきた植物には、確かに私たちの心に訴えかけるものがある。だが、これらの持つ価値がどのようなものか考えてみると、D 道徳的価値というよりは鑑賞の対象としての価値として説明したほうが、常識的な説得力があるように思われる。美しいものを保存しようという主張は決して無視されるべきものではないが、やはり道徳的価値に比べると規制の根拠としては弱い。

⑤ その一方で、動物に道徳的配慮を求める議論は、かなりの説得力を持つ。肉食主義者でなくとも、血を流し鳴き声をあげて苦しむ動物に、配慮は一切不要だという人はいないだろう。科学的にも、(少なくとも一部の)動物は痛みや恐怖を感じる事が判明している。そこで、せめて動物に内在的価値と権利を認めるのはどうだろうか。そうすれば、動物たちの生息地を守るという名目で、環境保護を強く推し進めることができるかもしれない。実際、動物愛護の活動家のあいだで広く受け入れられている倫理学説は、動物が私たちとある程度同じ心理機能を持つということ根拠に動物は道徳的な内在的価値を持つと訴えることで、ある程度の成功を収めている。

⑥ [※]しかしそれでも、動物の内在的価値に立脚した議論には、やはり私たちの多くが持つ自然観との乖離[※]が見て取れる。たとえば、幼い子どもが無邪気な残酷さを発揮して、[※]鋏^{はさみ}でハツカネズミの細長い尻尾^{しっぽ}を切り落とそうとするのを見たら、私たちは「そんなことはやめなさい」と止めるだろう。では、子どもがトンボの細長い胴体を切断しようとしているとき、私たちは「トンボの神経組織は痛みや死の恐怖を感じるほど発達していたかな。発達していないなら止める必要はないのだが」などと[※]逡巡^{しゅんじゆん}するだろうか。ほとんどの人はしないはずだ。むやみやたらと植物を引きちぎろうとする子どもを、草木がかわいそうだからという理由で止めさせる大人も多いだろう。実際に心理機能が発達しているかどうかとは別に、私たちは生物への(ときには生物ではない生態系や人工物に対しても)配慮が必要だと感じるのである。これは、私たちの知識不足のためではないことは明らかだ。^④ 私たちは自然科学の知識にもとづく思考をしつつ、それとは矛盾するような、対象への配慮を含む思考を二重に行っているのである。

(熊坂元大「環境問題を『道徳的に考えること』を考える——自然の内在的価値概念の意義と限界」から)

(注) [※] 内在的価値——筆者は前の文章で、「何かほかのもののために役に立つということではなく、それ自体としての価値」と書いている。

[※] 涵養——無理をしないで、ゆっくりと養い育てること。

[※] 屋久杉——鹿児島県の屋久島に自生する天然記念物に指定されたスギ。

[※] 乖離——本来結びついているものが、離れ離れになっていること。

[※] 逡巡——決断できないで、ためらうこと。

問一 二重傍線部①～⑤のカタカナを漢字で書きなさい。

問二 空欄 A ～ D に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ

選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ どうやら ウ もし エ あるいは オ いわば

問三 傍線部①「ある意味で皮肉な話ではある」とありますが、筆者はどのようなことが「皮肉」だと考えていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 行き過ぎた環境保護を改めて見直すことによって、自然の持つ固有の価値が再発見されること。

イ 自然そのものが持つ価値が重視されず、環境保護のために自然が手段として利用されること。

ウ 動植物や生態系を保護しようとすることで、かえって人間の所有する権利が制限されること。

エ 非人間中心主義の考えを大切にするあまりに、自然が持つ道具としての価値が重視されること。

問四 傍線部②「自由な経済活動も民主主義も立ち行かなくなるだろう」とありますが、筆者が

このように考える理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 規則が極めて抑圧的になると、個人が法律を悪用するようになり、他者よりも多くの利益を得ようとしたり、身勝手な行動をしたりして、社会がひどく混乱するから。

イ 厳しい規制で個人から自由や発言の機会を奪うと、社会に秩序や治安を保つ必要性を感じなくなる人が増えるなかで社会が悪化し、経済が良くない状態になるから。

ウ 厳しい規則を作ると、規制されていないことに対して好き勝手に振る舞う人が増えていき、社会を守るためにさらに新しい規則を作り出すことになってしまうから。

エ 規則が厳しくなると、個人自らが規則を大切にすることで好き勝手がなくなり、人々が社会常識に外れたり、反発的な態度を取ったりして、社会が成り立たなくなってしまうから。

問五 傍線部③「もう一つの問題は、自然に道徳的な内在的価値があるという着想自体にある」とありますが、筆者がこのように考える理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自然に内在的な価値などもともと存在しないにもかかわらず、自然開発や汚染を規制し、環境保護を推し進めたい人間たちが勝手に作りだした幻想にすぎないから。

イ 動物に内在的価値を認めることは容易であるが、自然を鑑賞の対象としてしか見ていない日本人にとって、自然に内在的価値を認めることは無理であるから。

ウ 自然の内在的価値とは何であるかを考えていくなかで、人々に理解してもらうことの困難さや規制をする際の理由として不十分であることが挙げられるから。

エ 自然には内在的価値があると主張し、環境保護を推し進めていったとしても、日本人の持つ自然観とはかけ離れており、人々の自発的な活動につながらないから。

問六 傍線部④「私たちは自然科学の知識にもとづく思考をしつつ、それとは矛盾するような、対象への配慮を含む思考を二重に行っているのである」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 対象に苦痛の感覚や心理機能があるかどうかを科学的に考える一方で、人間の判断をもとに対象への同情をするということ。

イ 対象が苦しみを感じているかどうかを生物学的に考えつつも、人間の子どもに与える精神的な苦痛をも配慮するということ。

ウ 対象に道徳的価値が存在するかどうかを考えながらも、同時に対象へよせる愛情などを考慮に入れた判断を下すということ。

エ 対象に内在的価値があるかどうかを十分に検討したうえで、人間にとって都合が良い身勝手な判断を選択するということ。

問七 筆者の環境保護に対する考え方の説明として、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×で答えなさい。

- ア 私たちの中に「非人間中心主義」の考えが十分に根づけば、理想的な「環境保護」の実現が早まり、自然破壊という地球規模での危機的問題を確実に解決することが可能となる。
- イ 地球上で完璧な「環境保護」を求めることは困難であり、人類の社会や経済の維持・発展のためには、一部の昆虫や植物などがある程度の犠牲を強いられることはやむをえない。
- ウ 「環境保護」を実践するには、自然科学の知識に基づいて作られた規制によって人間の行動を厳格に制限するよりは、道徳観や環境意識を尊重する態度を育むことが大切である。
- エ 動物の権利を認めて、生物同士で共存共栄をはかることは、「環境保護」につながるが、それはあくまでも理想であって、現実的な社会生活を考慮した視点が抜け落ちている。

問八 本文を三つの意味段落に分けるとどうなりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | ① | ／ | ② | ③ | ／ | ④ | ⑤ | ⑥ |
| イ | ① | ／ | ② | ③ | ④ | ／ | ⑤ | ⑥ |
| ウ | ① | ② | ／ | ③ | ④ | ／ | ⑤ | ⑥ |
| エ | ① | ② | ③ | ／ | ④ | ⑤ | ／ | ⑥ |

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国際ピアノコンクールの舞台はすでに三次予選まで進んでいる。その中でも、二十歳の栄伝
亜夜はかつて天才少女としてCDデビューをしながらも、母が死去した十三歳のとき以来、長
らくピアノが弾けなかった。また、二十八歳の高島明石は音大出身だが、今は楽器店勤務で妻
子もいて、コンクール出場制限ギリギリの年齢であり、今回が最後のコンクール出場だと考え
ている。以下の文は栄伝亜夜がコンクールでの三次予選の演奏を終えた後の場面である。

やはり、音楽は素晴らしい。

コンクールを目指してきてよかった。この一年間、耐えてきてよかった。このコンクールに出
てよかった。

そんな感慨がいつぺんに込み上げてきて、A 涙が溢れてくる。

※ 雅美が、知っている。※ コンテスタントを見つけたらしく、そちらに寄っていったのに安堵しながら、明石はロビーの隅で、何度も目を拭った。

① 誰も見てないだろうな、といい歳をして、こそそ泣いている自分が滑稽でもあり、愛おしくも
あった。

そして、彼は真っ先に彼女を見つけた——パッと目に飛び込んできたのだ。

ジーンズにセーター。顔を洗ったのか、化粧っ気もなく、さっぱりした顔の少女。全く飾り気も
なく、あんな素晴らしい演奏をした音楽家とは思えぬほど、気抜けしたような表情の、あの少女が。

どうしてそんな度胸が湧いたのか、自分でも分からない。しかし、明石は、気が付くと転がるよ
うにして彼女の元に駆け寄っていた。

「ありがとう」

栄伝亜夜は、きよとんとした顔で、突然自分に駆け寄ってきた明石を見上げた。

こんなに小柄な少女だったのか。

② 明石は、あっけに取られた。

目の前にした少女は、あどけなくて、ただ目ばかりが大きく、その目の光が印象的な二十歳の女
の子だった。

「ありがとう、栄伝さん」

明石は、もう一度言った。

亜夜は、ぼかんとした顔のままだった。

「素晴らしい演奏をありがとう——帰ってきてくれて、ありがとう」

明石は、心を込めて言った。

③ 亜夜はハツとしたような表情になった。

突然、彼女の目に、感情が顕れた。

何かを思い出したような。何かに気が付いたような。

その見開かれた目に、みるみるうちに涙が溢れてくる。

明石は、自分の目にもまたしても涙が湧くのを感じた。

なぜかは分からない。亜夜も、明石も、二人とも、^④ 同じ感情を共有して、同じ理由で泣いていることだけは分かった。

「あつ」

亜夜の顔がぐしゃりと歪んだ。

突然、亜夜は明石にしがみついて大声で泣き出した。

わーっ、という胸から絞り出すような、激しい、[※] 慟哭。明石にしがみついた指の力は思いがけなくとも強く、つかまれたところが痛かった。

つられて明石も泣いていた。

なんとという奇妙な状況だろう、とどこかで考えながらも、二人して抱きあってわんわん泣いている。しかし、それは不思議な心地よさと **B** に満ちた涙だった。

周囲が異様に感じて、こちらを注目していることは分かっていたけれど、二人とも泣き止まない。

「アーちゃん、どうしたの？」

遠くから、びっくりしたような声が響いた。

長身の[※] マサル・カルロスだ。隣に、長い髪の女の子がいて、彼女と一緒に近づいてくる。

「あー、うー」

「えーと、その」

明石も亜夜も、涙を拭い、^{はな} 涙をすすって、言葉を発しようとするのだが、どちらも言葉にならない。^{い。}

マサルたちは、顔をぐしゃぐしゃにして泣いている二人を呆然と眺めていたが、別に何かトラブルがあったとか、明石が亜夜を泣かせたとかいうわけではなく、なぜか二人して子供のように泣きじゃくっているだけだと気付いたようで、 **C** して顔を見合わせている。

明石と亜夜も、だんだんこの状況がおかしく感じられてきて、二人は赤い顔を見合わせ、やがて^ふ 噴き出した。

「すみません、その」

「ごめんなさい、いきなり」

同時に話し始めて同時に絶句し、そのこともおかしくて、あはははと身体を折って笑い合う。ひとしきり笑ったあと、やっと涙と笑いが収まった。

「失礼しました。僕は、その、同じコンクールに出ている、昔からあなたのファンで」
明石が自己紹介しようとするのを遮おさえって、亜夜は首を振った。

「高島明石さんでしょう。あたし、あなたのピアノ好きです」

亜夜は、あのきらきらした大きな目で言った。

明石は「えっ」と思わず叫ぶ。

「僕の名前、覚えていてくれたんですか」

「はい。次の演奏も聴きに行きたいです」

それが決してお世辞せじではないことを、明石は直感で理解していた。

本当に。栄伝亜夜が、俺の演奏を。

⑤ おかん みざる 悪寒にも似た身震いが、全身を貫いた。

「じゃあ、また」

「また、きつとどこかで」

亜夜は微笑ほほえんで、明石から離れた。

どうしたの、アーちゃん、あの人知り合いだったの、と話しかけるマサルと女の子のところに戻かえって、いく、亜夜の背中を見送りながら、明石は動けなかった。

⑥ やはり、始まりだった。

明石はそう心の中で叫んでいた。

どくどくと全身に熱いものが駆け巡る。

このコンクールは始まりだ。今ようやく、俺は、自分の音楽を、音楽家としての人生を始めたところなのだ。

これは予感じゃない。確信だ。

彼は 武者震いIIのような興奮と共に、そう自分の中で繰り返つぶやし、咳つばいていた。

(恩田 陸『蜜蜂と遠雷』から)

(注)※ 雅美 —— 明石の友人。

※ コンテスタント —— コンテストの出場者。

※ 慟哭 —— 大声をあげて泣くこと。

※ マサル・カルロス —— 亜夜の幼なじみ。ピアノコンクールにも出場し、予選を勝ち進んでいる。

問一 波線部Ⅰ、Ⅱの本文中における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 感慨

- ア 見えていなかった真実に気がついて、興奮すること。
- イ 美しいものに触れて、心の底から感動すること。
- ウ 過去の経験などを思い出して、しみじみと思うこと。
- エ 成功は間違いないと確信して、ほっと安堵すること。

Ⅱ 武者震い

- ア 初めてのことを経験したとき、恐ろしくて体が震えること。
- イ 大きな決断を迫られたとき、緊張が高まって体が震えること。
- ウ 思いがけない出来事に遭遇したとき、あせって体が震えること。
- エ 重大な場面に臨んだとき、心が奮い立って体が震えること。

問二 空欄 A ・ C に入るものとして、最も適当なものを次の中からそれぞれ選

び、記号で答えなさい。

A ア とめどなく イ あどけなく

ウ ゆるぎなく エ 途方もなく

C ア ぼんやりと イ きよとんと

ウ うっかり エ びっくり

問三 空欄 B に入るものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 危機感 イ 緊張感 ウ 高揚感 エ 安心感

問四 二重傍線部 X 「この」と同じ品詞のものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 素晴らしい演奏

イ 小柄な少女

ウ あなたのファン

エ きらきらした大きな目

問五 傍線部①「誰も見てないだろうな、といい歳をして、こそこそ泣いている自分が滑稽でもあり、愛おしくもあった」とありますが、このときの明石の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 素晴らしい演奏をした後に全く飾り気もなく気抜けしたような表情でいる亜夜のことを、特別なピアニストだと思っていた自分に対して、情けなさや恥ずかしさを感じている。

イ 行方不明だった亜夜が帰って来てくれたことに加え、当日になって実力以上の演奏をしたことに対して、感激して泣いている自分に年甲斐のなさといとしさを感じている。

ウ 亜夜がピアニストとしてコンクールに戻って来てくれたことに加え、素晴らしい演奏をしたことに対して、感動して泣いている自分に年甲斐のなさや好ましさを感じている。

エ 亜夜のコンクールでのピアノ演奏を聴き、そのあまりの素晴らしいさに自分との実力に大きな差があることを痛感し、未熟な自分に対して情けなさといわしさを感じている。

問六 傍線部②「あっけに取られた」とありますが、このときの明石の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 素晴らしい演奏によって亜夜存在を大きく感じていたのに、実際の彼女がごく普通の少女だったので、その意外性に驚いている。

イ 素晴らしい演奏家として亜夜を尊敬していたのに、彼女が気抜けしたような姿だったので、これまでの自分の感情のやり場に困っている。

ウ 今まで亜夜に大きな憧^{あこが}れを抱いてとても身近に感じていたのに、相手がそっけない態度だったので、急速に熱がさめてしまっている。

エ せっかく亜夜の演奏に感激した気持ちを伝えたのに、相手が自分の気持ちを理解してくれないほど幼いので、驚きあきれている。

問七 傍線部③「亜夜はハッとしたような表情になった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ピアノの才能を数年前から認めており、コンクールで優勝するだろうと思っていた明石から、演奏を高く評価する言葉を掛けてもらったから。

イ 最初は明石が誰か判然としなかったが、同じコンクールの出場者であり、そのピアノ演奏に好意を抱いている演奏者であることに気づいたから。

ウ コンクールの三次予選の演奏が終わったばかりで気抜けしていたところに、明石から突然声を掛けられてようやく現実の感覚が戻ってきたから。

エ 明石のことは誰だかわからないが、熱心に自分のピアノ演奏を称^たえてくれる様子に、コンクールでの演奏が間違いではなかったと実感したから。

問八 傍線部④「今同じ感情を共有して、同じ理由で泣いていることだけは分かった」とありますが、この場面における二人の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ピアノコンクールは時として孤独で過酷な状況に陥りがちだが、同じ出場者の中にライバルとして高め合うことのできる相手がいたことに感動している。

イ 過酷なピアノコンクールの緊張感から解放されるとともに、自分のピアノ演奏が周囲の人々から高く評価されることに心から喜びを感じている。

ウ ピアノコンクールに出場し評価され続けることは並大抵の精神力では出来ないの、周囲の協力のおかげで三次予選まで終えたことに感謝している。

エ これまではピアノを演奏することがままならない状況もあったが、現在はピアノの演奏を続けコンクールに出場したことを良かったと思っている。

問九 傍線部⑤「悪寒にも似た身震いが、全身を貫いた」とありますが、このときの明石の気持ちを説明したものととして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことを知っていながら、そのことをわざと黙っていた相手に対する腹立ち。

イ 優れたピアニストが、自分の演奏を同じように認めてくれていたことに対する喜び。

ウ 素晴らしいと思っていたピアニストが、意外にも普通の少女だったことに対する困惑。

エ 一方的にしゃべっていたのに、相手も自分を知っていたということに対する羞恥。

問十 傍線部⑥「やはり、始まりだった」とありますが、明石は何が始まったと考えていますか。本文から十字以内で抜き出して答えなさい。

問十一 この文章における表現の特徴について説明したものととして、適当なものを次の中から二つを選び、記号で答えなさい。

ア テンポの良い会話や平易な表現を多く用いることで、登場人物の気持ちが読者に生き生きと伝わるように描いている。

イ 直喩や隠喩を多用することで登場人物の内面をより分かりやすくするとともに、それぞれの人物像に深みを与えている。

ウ 「ぐしゃりと歪んだ」「きらきらした大きな目」のような擬態語を使用し、登場人物の様子を鮮やかに表現している。

エ 話を時間の流れに沿って書くだけではなく過去の内容も挿入することで、文章構成に厚みを持たせて描写している。

オ 会話文でも「」を用いていない箇所を設け、実際の会話と心の中で思った内容との違いを分かりやすく区別している。

カ 複数の視点から様々な場面を描写することによって、登場人物の繊細で複雑な気持ちが交錯していることを表している。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、[※]播磨守公行が子に、佐大夫とて、五条わたりにありしものは、この比ある、^{こころ}顕宗といふものの父なり。その佐大夫は、[※]阿波守定成が供に、阿波へくだりけるに、道にて死にけり。

その佐大夫は、[※]河内前司といひし人の[※]類にてぞありける。その河内の前司がもとに、[※]あめまだらなる牛ありけり。その牛を人の借りて、車かけて、[※]淀へ遣りけるに、[※]樋爪の橋にて、牛飼あしく遣りて、かた輪を橋より落としたりけるに、引かれて車の橋より下に落ちけるを、車の落つると心得て、牛の踏み広がりて、立てりければ、[※]胸がい切れて、^①車は落ちてくだけけり。牛はひとり、橋の上にとどまりてぞありける。人も乗らぬ車なりければ、そこなはるる人もなかりけり。「^Iゑせ牛ならましかば、引かれて落ちて、牛もそこなはれまし。いみじき牛の力かな」とて、その辺の^{へん}人いひ X ける。

かくて、この牛をいたはり飼ふ程に、この牛、いかにして失せたといふことなくて、失せにけり。「こは、いかなることぞ」と、求め騒げどなし。「離れて出でたるか」と、近くより遠くまで、尋ね求めさすれどもなければ、「いみじかりつる牛を失ひつる」と嘆くほどに、河内前司が夢に見るやう、この佐大夫が来たりければ、これは海に落ち入りて死にけると聞く人は、いかに来たるにかと、思ひ思ひ ^②出で逢ひたりければ、^②佐大夫がいふやう、我はこの[※]丑寅の隅にあり。それより日に一度、樋爪の橋のもとにまかりて、苦を受け侍るなり。それに、^{おのれ}己が罪の深くて、身の極めて重く侍れば、乗物の堪へずして、[※]かちよりまかるが苦しきに、このあめまだらの御車牛の力の強くて、乗りて侍るに、いみじく求めさせ給へば、今五日ありて、六日と申さん[※]己の時ばかりには、返し^{たてまつ}奉らん。いたくな求め給ひそと見て、覚めにけり。「かかる夢をこそ見つれ」といひて過ぎぬ。

その夢見つるより六日といふ巳の時ばかりに、そぞろにこの牛歩み入りたりけるが、II
いみじ

く大事したりげにて、苦しげに、舌垂れ、汗水にてぞ入りたりける。「この樋爪の橋にて、車落ち
入り、牛はとまりたりける折おりなんどに行き合ひて、力強き牛かなと見て、③
借りて乗りて歩きけ
るにやありけんと思ひけるも、④
恐ろしかりける」と、河内前司語りしなり。

『宇治拾遺物語』から

(注)※ 播磨守公行 ― 佐伯公行。

※ 阿波守定成 ― 藤原定成。

※ 河内 ― 現在の大阪府の一部。

※ 前司 ― 前任の地方官。

※ 類 ― 一族。

※ あめまだらなる牛 ― 毛色みずあめが水飴色(暗黄色)で、体全体に白か黒のまだら模様
ある牛。

※ 淀 ― 現在の京都市伏見区の地名。

※ 樋爪 ― 現在の京都市伏見区の地名。

※ 胸がい ― 馬や牛の胸から鞍くらにかけ渡す組み紐ひも。

※ 丑寅 ― 北東の方角。

※ かちより ― 徒歩で。

※ 巳の時 ― 午前十時ごろ。

問一 二重傍線部を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

問二 傍線部Ⅰ・Ⅱの口語訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 多せ牛ならましかば、引かれて落ちて、牛もそこなはれまし

ア つまらない牛であったので、引きずり落とされ、他の牛と一緒に死んでしまったよ

イ つまらない牛であったら、つられて落ちて、牛も死んでしまっていただろうに

ウ つまらない牛であったら、引きずり落とされ、牛もたどり着けなかっただろうに

エ つまらない牛であったので、つられて落ちて、牛も川底まで行ってしまったよ

Ⅱ いみじく大事したりげにて

ア ひどい罪をおかしてしまったようで

イ ひどい事件に巻き込まれたようで

ウ ひどく打ちひしがれてしまったようで

エ ひどく大変なことをしてきたようで

問三 傍線部①「車は落ちてくだけにけり」とありますが、このことの原因が書かれている部分を本文から二十五字以内で抜き出し、最初の五字を答えなさい。

問四 文中の X に入る最も適当な語句を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ほめ

イ せめ

ウ 悲しみ

エ はづかしがり

問五 波線部 a 「来たる」・ b 「出で逢ひたり」の主語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 公行 イ 佐大夫 ウ 顕宗 エ 定成 オ 河内前司

問六 傍線部②「佐大夫がいふやう」とありますが、その言葉はどこからどこまでですか。本文から抜き出し、最初と最後の三字を答えなさい。

問七 傍線部③「借りて」とありますが、誰が何をどのような理由で借りたのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ある人が河内前司の所有している牛を、多くの荷物を淀まで運ぶために借りた。

イ 顕宗が河内前司の所有している車を、自分の所有している牛に引かせるために借りた。

ウ 公行が河内前司の部下である佐大夫を、定成のお供とするために借りた。

エ 佐大夫が河内前司の所有している牛を、樋爪の橋まで移動するために借りた。

問八 傍線部④「恐ろしかりける」とありますが、河内前司が「恐ろし」がったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 佐大夫が夢で言った、「死後の罰として重い荷物を運ぶために牛に手助けしてもらった」という内容通りなのが現実起こったから。

イ 佐大夫が夢で言った、「自分で自分の体重を支えきれないために牛に手助けしてもらった」という内容通りなのが現実起こったから。

ウ 佐大夫が夢で言った、「自分自身の罪の深さのために強い牛の力を借りることになった」という内容通りなのが現実起こったから。

エ 佐大夫が夢で言った、「死んだ自分が歩けるようになるためには牛の力が必要であった」という内容通りなのが現実起こったから。

問九 本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 河内前司は飼っていた牛が特に理由もなく姿を消してしまったので、人に遠方まで探させたが見つからず、憂^{うれ}え悲しんだ。

イ 五条あたりに住んでいた顕宗は河内前司の血縁の者であるが、佐大夫は播磨守公行と阿波守定成の血縁の者ではない。

ウ 河内前司が飼っていた牛は、誤って橋から荷車ごと落ちそうになったが、佐大夫のおかげでその場に踏みとどまった。

エ 阿波守定成は播磨守公行の命令によって阿波の国へ行くことになっていたのだが、到着する前に亡くなってしまった。